

## えひめグローバルネットワークとモザンビーク モザンビークと愛媛のつながり

NPO 法人えひめグローバルネットワーク代表  
竹内 よし子

えひめグローバルネットワークは、1998年4月に「国際協力勉強会」として発足し、2005年10月6日、「国際協力の日」にNPO法人化した市民活動団体です。国内外を問わず、地球規模の視点で捉えながら、グローバルに国際、平和、環境、人権、福祉など、社会全般に関する様々な問題の解決・改善を図るため、複数分野を横断して地域密着型・市民参加型で

- (1) 国際協力活動の推進、
- (2) 地球市民教育の普及、
- (3) セクターを越えたパートナーシップとネットワークづくり、および
- (4) 持続可能な市民社会の構築に寄与することを目的としています。



モザンビークとの出会いは、勉強会で取上げた「銃を鋤<sup>くわ</sup>へ」と呼ばれる平和支援プロジェクトとの出会いがきっかけとなりました。同国は1975年にポルトガルから独立を果たしますが、その後も、冷戦構造下における代理戦争とも呼ばれる内戦で1992年に終戦を迎えるまで戦争状態が続きました。1995年から始まったこの「銃を鋤<sup>くわ</sup>へ」プロジェクトは、モザンビークキリスト教評議会（CCM=Christian Council of Mozambique）が中心となって政府や警察、軍隊とともに進められています。聖書イザヤ書からの引用で名付けられており、剣を鋤<sup>くわ</sup>や鋤に換え「戦いを学ばない」という言葉に続きます。



平和教育と共に村から村へ・・・と活動を広げ、国内に残された武器を集めようとする市民の主体的な活動に感銘し、その交換物資に使われる放置自転車やミシンを日本から送る活動に目が留まりました。「松山からも応援しよう」ということで行動を起こしたのが、当団体のモザンビーク支援・国際協力活動の具体的な一歩で、同時に愛媛県松山市が条例で定めた放置自転車の「市民団体への無償譲渡」の始まりとなりました。

市民が参加する平和構築プロジェクトは世界的にも稀有です。モザンビークで集められた武器の大半は爆破処理されますが、一部は切断され、アーティストの手によって平和を訴えるアートへと生まれ変わります。世界の平和は、心で願うばかりでは訪れませんが、市民による平和活動の「実践」が伴うなら実現に向かう力があるのではないかと勇気付けられます。そして、松山から送る自転車についても、市民参加型、地域密着型で工夫しながら市民の手で贈っています。

日本では、アフリカを知る機会、出会う機会、学ぶ機会が限られているため、アフリカに対する理解はなかなか広がっていませんが、2005年から始まった「持続可能な開発のための教育(ESD=Education for Sustainable Development)」の一事例として、当団体が支援する「銃を鋤<sup>くわ</sup>へ」が取上げられたことがき

っかけとなり、モザンビークという国の名前は、一般市民にも知られるようになりました。愛媛では、松山市「平和の語り部」講師派遣事業や（財）自治体国際化協会のアドバイザー派遣、外務省 NGO 相談員などの講師として各種学校や大学、自治体職員の勉強会などを通じて事例紹介されることが多く、愛媛新聞やNHKなどのコミュニティメディアも積極的に取上げてくれるため、アフリカで知っている国は？と聞くと「モザンビーク」と応える市民が増えています。現在も、松山市とともに自治体国際化協会のモデル事業が進んでおり、松山市内にある新玉小学校では年間を通じた国際理解・平和学習の3回目を迎えています。小・中学校、高校、大学と連携していくためのさまざまな勉強会も開催しており、モザンビークのルリオ大学と連携している愛媛大学の今後の展開も注目を集めているところです。

ところで、ダニエル・アントニオ駐日モザンビーク共和国大使館特命全権大使は、2005年10月以来、2009年7月までに8回愛媛を訪問されています。そして、他にもモザンビークからの要人がたくさん愛媛を訪れています。通常なら、日本を紹介するコースとして「東京・京都・広島」が定番でしょうが、広島から愛媛・松山は水中翼船で1時間ほどなので、足を伸ばして立ち寄ることが難しくありません。モザンビークを支援するNGOのところへモザンビークから要人が訪ねてくる・・・当団体は、こうした機会を大いに活用して、その都度、学校訪問や交流会などモザンビークを知る機会を市民へ拓いていきました。市民は、こうした本物との交流を通じて、モザンビークを身近に感じ、理解を深めていくことができます。外務省の出張所は地方にありませんが、こうした国内の官民連携や市民交流を通じてオールジャパンの国際協力の一歩がスタートしている、と言っても過言ではないでしょう。



こうしたモザンビークとの交流が進み、ゲブザ大統領をはじめ閣僚を含む33名の代表団が2008年5月31日に愛媛を訪問されました。横浜で行われた「第4回アフリカ開発会議」終了後に愛媛を訪問することが決まったのはその3週間前だったため、受入れは大変でしたが、愛媛を訪問された初めての国家元首となり、愛媛の歴史を刻むこととなりました。当団体の活動はまだまだ小規模ですが、たとえ、小さな支援で

あっても、基本的な「知ることの大切さ」「知ろうとする大切さ」を忘れず、市民目線の国際交流や国際協力活動を継続することで、日本人のアフリカ理解の裾野を広げていけたらと願っています。ゲブザ大統領の訪問は、愛媛の市民とともにこうした友好関係を築くことの大切さ確認する好機となりました。

そして、もう一方で、その市民目線の大切さを教えてくれたのは、モザンビークからの研修生でした。当団体が招いた研修生は、小学校卒で中学校には行けない環境にあった低学歴の女性や、十分なコミュニケーション能力や働く意欲があるのに有給の仕事を得るチャンスめぐり合えなかった高校卒業の青年です。言葉や文化や習慣の壁を乗り越えながら、愛媛にたくさんの友人をつくり、日本とモザンビークを行き来するであろう人的交流を深めることができました。しかし、まだまだお互いに学びあうことが山のようにあります。そして、解決・改善すべき課題を共に担っており、協力し合える方法をもっともっと考えていかななくてはならないと思っています。愛媛とモザンビークの関係に興味を持った方、ぜひ、松山に足を運んで下さい！

